

外国映画の中の靴

“20世紀の芸術”ともいわれている映画。オールドファンには懐かしいアメリカ映画「モロッコ」(1930年製作)で主演のマレーネ・ディートリッヒが砂漠に恋人を追って脱ぎ捨てたハイヒールが大きくクローズアップされるシーンが印象に残るものである。カラー作品になって1939年製作の「オズの魔法使い」では少女役のジュディ・ガーランドが赤いルビーの靴を履いてかかとを3回鳴らすシーンがある。この映画に使用された靴はアメリカのスミソニアン博物館に収蔵されているという。

1948年に製作されたイギリス映画「赤い靴」はアンデルセンの童話をテーマにしたバレエの映画で、1950年日本で公開され、当時街の靴店のウインドウには赤い靴が並び女性の足もとのおしゃれが見直されるようになった。

外国映画とファッションの関係は深く、「ローマの休日」(1953年製作)などは「オーディリー・ヘップバーン」の頭の上から足もとまで流行が広まり、1954年公開の「麗わしのサブリーナ」ではトレアドル・パンツに

履くフラットな靴が“サブリーナシューズ”として有名になり、ホンコンシューズやカッターシューズが普及することになる。

外国映画では服装や履物もよく時代考証されている。古代エジプトやギリシャ、ローマ時代の史劇に登場するものでは、1959年公開された「ベンハー」のサンダルが有名になった。

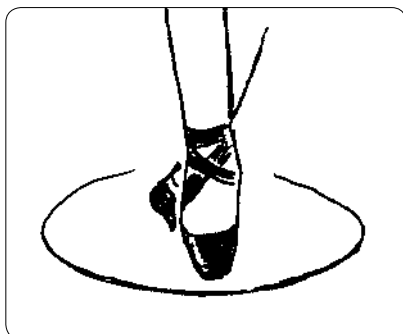
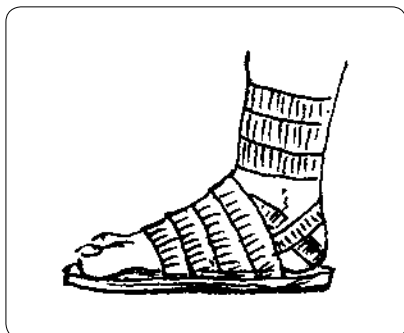
アメリカ大陸開拓時代を物語る西部劇映画では各種の靴が見られる。先住民の履くモカシンやワラチ、騎兵隊の乗馬靴やカウボーイのウエスタン・ブーツなど多様である。

また、チャールズ・チャップリンが「黄金狂時代」(1925年製作)の中で靴を喰べるシーンはよく知られている。

1954年製作のイギリス映画「ホブスの婚選び」は19世紀末の靴職人の物語で、当時の靴店の様子がよく描かれている。

そして、エリザベス女王のデザイナーとして知られるハーディ・エイミスが衣装デザインを担当したSF映画「2001年宇宙の旅」では、無重力の空間で履く宇宙時代の履物を見ることが出来る。

古代ローマのサンダル



「赤い靴」のバレエ・シューズ

西部劇のカウボーイ・ブーツ





「麗しのサブリナ」よりフラット・パンプス



「オズの魔法使い」よりルビーのパンプス